

小田実全集（小説 第1巻）

明後日の手記／泥の世界

講談社

小田実全集

Makoto Oda

サンプル版

目次

明後日あさっての手記

第一部 神たそがれの黄昏

第二部 迷える小羊らの群

第三部 明後日あさっての手記

後記

泥の世界

157

154 119 53 7

明あ後さ日つの手記て

私はもはや明日すら信ずることは出来ない。  
強いて信ずるとすれば《明後日》あさってを信ずる他はないのだ。

I sat upon the shore  
Fishing, with the arid plain behind me  
Shall I at least set my lands in order?  
London Bridge is falling down falling down falling down  
T. S. Eliot *The Waste Land*

## 第一部 神の黄昏たそがれ

滯はてしなく続く映画のようであった。

黝くろずんだ薄鼠色うすねずいろの画面が突然明るくなったり暗くなったりしながらぼくの網膜を流れた。時にはその流れは静止し、画面の背後でうごめく火のようなものがぼくの閉じた両眼を射るように燃え上った。火は次第に燃え拡ひろがった。その火に周囲は一層暗く、闇やみは不気味ふきみに慄ふるえた。火は燃え拡がりながら、静止しているものようであった。——高速度撮影の一瞬ひとコマを見るように大きな火焰かえんをかかげたままぐつたりとしていた。そのまま火はぼくの両眼一ぱいに拡がり、冷い火焰が顔をおおった。火焰の中で黒い建築物が次々に崩れ落ちて行くのが見えた。それはちょうど火災のセット撮影のように呆気あつけなく崩れ落ち、その度ごとごとに新しい火焰を加えるのであった。そしてその大きな火はじつと動かなかつた。

かすかに何かが認められた。薄ぼんやりした暗い何かが、うずまき、重なり合つて徐々に近づき、次第に輪郭を形成して行つた。虚無の底から羽搏はばたく怪鳥のように、それは大きく翼を拡げた。その感触がぼくの鼓動をあやしく速めた。突然、火の流れは止やんだ——顔だつた。いくつかの薄ぼんやりした顔がオーバーラップしながら暗い網膜の底一面に拡がった。捉とらえどころのない影像が重なり合いつつ次第に一つにまとまろうとして、しばらく小刻みにふるえた。それがやがて静止に近づくとつれて、

暗い背景に蒼白あおしろい一つの像が浮び上った。

母の顔だった。もう画面は動かなかつた。何かに憑つかれたように、何かを求めるように母の顔は蒼白くぼくをみつめた。その母の顔をぼくはどこかで見たことがあるのだ。暗い物置の片隅かたすみで、母はよくそんな顔つきをして佇たつていたのだった。ぼくはその時、雛祭ひなまつりの道具の箱や古びた鳩時計はとどけいなどが雑然と積み重ねられた一隅のほこりつぼい空間に坐すわつて、奇妙に大きい眼玉めだまの少女たちが描かれてある薄汚れた絵本を拵あげていたのだった。それは絵本ではなかつたのかも知れぬ——くすんだ色の新聞紙に混まつて色褪あせた極彩色の大型の書物が五月人形のかげに、散在していたが、その中の一冊だったのだろうか？ 大型のメエルヘンの挿絵さしえだけをめくっていたのかも知れない。ぼくは姉と争った後では、きまつてここへ入り込むのだった。そんなぼくを少したつと母はいつも、そつと忍び足で入つて来て静かに抱き上げて連れ戻もどすのだった。ぼくはそうして貰もらいたいためにそこへいつも入り込んでいたのだろう。だがその日はいつもと違つていた。母はそつと細目とびらに扉を押し開いて入つて来たが、ぼくの頭髪を優しく愛撫あいぶする代りに、そのまま背後にじつと佇たつていた。ぼくは母の水色のワンピースを横眼でちらと見ながらわざと素知らぬ顔で本に見入つていた。大きな眼玉の姫君が、涙をたたえて棺の中から王子に懇願こんがんしていた。その何かに憑つかれたような媚こびを含んだ大きな両眼には拙つたないかき方で涙が描かれてあるのだった。ぼくはたまらなくなつて振り返つた。かすかな西陽にしひが埃ほこりっぽい空気を通して彫りの深い母の顔に深い陰影をつくつていた。母は泣いているのだった。今しがた絵本の中に見た涙を、ぼくは不思議なものを見るように母の眼に認めていた。母の大きな両眼にも涙は宿り、母はそのまま窓の方へ視線を向けているのだった。その蒼白い母の横顔と、今見たばかりの奇妙な絵

が、ぼくの稚い意識の下で重なり合い、ちょうど自分たちが棺の底にいるかのように感じたのだろうか、ぼくもまた突然泣き伏したのだった。母の水色のワンピースと、射し込む西陽に映し出された埃が、奇妙な対照をつくつてしばらくは意識の底で母と絵の周りをぐるぐる点滅しながらうずまいた。……そのときの追憶が次々に網膜の画面に浮び上り母の顔に重なり合つて行つた。蒼白いその画像は期待にふるえるように小刻みに動いた。それは死人の眼だった。棺の底からもう一度、生と愛を願う姫君の眼だった。けれどもそのまま母の顔は変貌を重ねて行つた。別の新しい画像が背後から重なり合つて映し出されるように、その眼が凹み始め、次第に一本の太い皺と無数の細かい皺が額に浮きで、鼻が奇妙にゆがんで見えた。すでに母の顔ではなかつた。ぼくはこの顔を、何時、何処で見たのだろうか？ そう、いつ、どこで？ 突然ぼくは想い出す。

——Comment allez-vous? Comment allez-vous?

あの老婆の顔だった。突出してゆがんだ鼻、眼脂のたまつた輝きの喪失われた眼、虚ろなそれについてどこかずるそうな表情、無数の皺に刻みこまれた悔恨と無恥、昔は美しかつたかも知れぬこの顔——同じように何かに憑かれたように、何かを求めるようにふるえ動くあわたましい顛顛の動き。父に連れられてぼくは歩いてきた。薄明の異国の不思議な情景がぼくの小さな頭脳の動きをほとんど停止させ、恐怖と好奇の混乱の中で、ぼくは一方の手を父に、一方の手を姉に托して自分をわずかに支えていたのだった。ぼくはほとんど記憶していない。妙にゆつたりしたサイレンの響きと、すでに明け始めた橋上の情景の他は——父は例のごとく黙りこくつて、自分だけの瞑想にでも耽りながら、ぼくの手を乱暴に引っぱっていたのかも知れぬ。ぼくはまたぼくで父のあの暴風のような愛情の表現

を恐れながら、——それは何時でもぼくを苦しめ怖し<sup>おそろ</sup>しからせたものだが——けれども一方ではこの異国の喧噪<sup>けんそう</sup>の中ではたまらなく心細く感じて、ぼくの手を父のそれにいよいよやながらしつかりと結びつけていたのだった。上海<sup>シャンハイ</sup>は不思議な都会<sup>かい</sup>だった。始めて見た異国の風景、絵本の世界の住人たちの総登場、——曇つた冬空を背景に寒々とした登場——ぼくは不安にふるえながら歩いてた。父と姉の間でわずかに自分を支えて——。

ぼくらはいつのまにかフランス租界のあたりまで来ていた。フランス——ぼくはあの匂<sup>にお</sup>いと共に想い出す、いつも小さい、いろいろなものを象<sup>かたど</sup>つたお菓子<sup>かし</sup>を呉<sup>く</sup>れた尼さんと共に。その頃<sup>ころ</sup>、近所にその尼さんたちは住んでいたのだ。彼女たちにはふしぎな香りがあった——それは香料の匂<sup>にお</sup>いだったのだろうか——甘い何とも言えない匂<sup>にお</sup>い。お菓子の甘さと共に体にしみ渡るようなその甘さ——それがぼくのフランスだった。

けれどそのフランスは異つた形で表われた。醜<sup>みにく</sup>い腰の曲つた老婆の形で——（何という寒々とした登場）ぼくらは突然呼び止められた。しわがれた、

——Monsieur! Bonjour, Monsieur!

という叫びで。それぎり老婆は何も言わなかった。

——Comment allez-vous? Comment allez-vous?

のリフレインの他は。

それは何とも形容し難い声だった。それはちようど、夜寝静まつた頃に遠くからひびいて来る屋台の支那<sup>しな</sup>蕎麦屋<sup>そばや</sup>の笛の音に似ていた。単調ではあるが人を刺すような悲しみに満ちたりフレインであつ

た。ぼくはそれを怖がりいつも寢床の中で眠れない眼を無理に閉じようと試みるのだった。老婆は何か玩具おもちゃを売っていた。突然、老婆は口をつぐんだ。ヴァイオリンの絃げんがアレグロの急調と共に切断したような不気味な沈黙があたりを占めた。老婆は顔をあげてじつと父を見た——その眼をぼくは忘れることが出来ぬ——眼脂だらけの眼がじつと父をみつめているのだった。あたかも何かを憐あわれむように——。老婆は口の中で何かぶつぶつぶやきながら、突然口を開いてニツと笑った。齒がほとんど無い口腔こうくうの内部では舌が不活潑ふかつぱつに動いていた。中国人離れのした、けれどやはり中国的なその横顔——襪ぼろと垢あかに埋れた中背の屈曲した体、——老婆はどここの国の人間なのだろうか。いつのまにか老婆はぼくを見下していた。その表情に嘲あざけりの色があつたようだ。ぼくは父の手を堅く握りしめ、それを大きくゆり動かした。思わず立ち止っていた父もそれに気づいたように歩き出した。ぼくと姉はひきずられるようにそれに続いた。それからぼくはどう歩いたのか？ ぼくはどうしても想い出すことが出来ない。

ただぼくは次のことを想い出す。少したつてからの——おそらく半年位後のことだつたらう。大阪おおさの自宅さかで父はある日、突然このことを言い出したのだった。

——英夫、あれは混血児まじけだよ。混血児は変だな、さしずめ混血婆まじけだな。

父はそう言いながら豪放に笑うのだった——父の膝ひざの上でふるえているぼくの頭髪を荒々しく愛撫しながら。母は遠慮深く微笑した。いつもの母のどこか高貴な微笑とちがつて——どこかずるそうな——そう、あの老婆の薄笑いを浮べるのだった。よみがえつて来た半年前の重苦しい記憶が、この夏の真昼にあの上海の寒々とした空気を吹きおくるのだった。だが、それにもまして、新しい衝動が

ぼくの腹の下部の方からわき上つて来るように感じた。むしろ本能的な素早さでそれはぼくの全身を  
かけめぐった。

——一体混血つて何だろう？——

混血・コンケツ……。——何か秘密の扉を、愉楽の扉を押し開くような快感がぼくを襲った。それはその頃、ぼくが知り始めたケツコンということばに語呂ごろが通じていた。ぼくの本能は何故なぜか素早くその二つを結びつけ、暗黙のうちにその二つが通じ合うように感じた。ぼくはそれをくり返しつつやいた。ケツコン・コンケツ、ケツコン・コンケツ……。けれどもぼくは何もたずねようともしなかった。始めて羞恥しゆうちの感情がぼくを襲い、ぼくの全身をむしろ快よくしびれさせた。後でぼくはそつと姉にたずねるのだった。——コンケツつて何のこと？　姉は嘲けるようにこともなげに答えるのだった。——馬鹿ばかやな、混血いうたら血の混じることや——

——一体どうして人の血が混り合うのだろうか？

ぼくの全身をまたもや新しい戦慄せんりつが襲った。どこで？　どうして？　そしていつ？　——明日にでも医者は血を混ぜるために家をやつて来るのだろうか？　まぜられた人間はあの老婆のように——  
Comment allez-vous? をくり返すのであろうか？　みなあのように醜く老いばれてしまうのだろうか？　けれどもその疑問は全くくつがえされた。

——清子さんかつて、みんな混血児や言うてはるし——

姉はこともなげに言うのだった。姉の通っていたミッションの小学校には——その幼稚園にぼくはいたのだが——混血児が多かったのだった——そして清子さんは姉の友達だった。眼の大きな色の白

い神経質そうなやせた少女だった。ひそかにぼくが女王のように、ある或いは姫君のようにあがめていたこの少女が混血児だつて？ —— ぼくのあたまにあのリフレインが繰り返される。

—— ケツコン・コンケツ、ケツコン・コンケツ……

何か甘い陶醉の中で繰り返すのだった。そのぼくを姉はいつも嘲けるようなまなざしで見つめていた。ぼくは、動物的な憐れみの表情をさえその醜いゆが歪んだ微笑に感じたのだ。

涯しなく続く映画のようであつた。

—— その姉の顔がそのまま次第に大きくなり、画面に大きくクローズ・アップして迫つて来た。けれどもこのぶくぶくふくらんだ姉の顔は、どこかあのほっそりした清子さんの顔のようでもあつた。しばらくそうして薄ぼんやりした画面が流れていた。背景に淡く闇を溶かしこみ、小刻みに上下動しながら、まるで涯しがないもののように続いていた。それはまた母の顔のようでもあつた。あの死んだ顔つきでもあつた。或いは昼間見たフォクシアの短篇集の表紙の女のようにもあつた。やがてその女の顔が細長く伸び、いつのまにか清子さんの顔に変わつていた。すべての顔が死面だった。けれどあの不気味なショパンの手の石膏像せつこうぞうのようにそれでいて生きていたのだつた。全てが奇妙な微笑を浮べて、ぼくを嘲笑するように捉え難くゆつくり動いていた。けれども突然その動きは止まった。それは一人の少女の顔だった。ボール紙の冠をかぶつた蒼白い少女の顔だった。

—— お前、あいつに惚ほれてるんだろ ——

醜い声がどこからか聞えて来た。

—— お前、あいつに惚ほれてるんだろ ——

それはもう遠い昔のことではなかった。わずかに三月前の学校の演劇会の時——あの古びた木造の講堂の黒いカーテンで真暗にされた一隅のことではなかったか？ あるとき、ぼくは友達群から離れて急造の照明台の上に登り一心に舞台をみつめていたのだった。彼女は金粉をちりばめたボール紙の王冠をかぶつて舞台の中央に一人坐っていた。スポット・ライトのやわらかな光線がその金粉を輝かし、彼女の全身を浮き立たせていた。彼女はそれを意識したかのようにしずかに頭を動かした。水色のドレスだつた。彼女のやせ細つた体がその光の下でむしろぎこちなく見えた。細い腕が、あやしく蛇のようにまだ十分発達しきらない胸をゆれ動いた。ぼくの眼は激しく息づきながらそれを追つていた。何かの童話劇的一幕だつた。森の妖精ようせいたちはまだ眠っていた。彼女ひとりが起き、彼女ひとりがみつめていた。誰を？——

——お前はたしかにあいつに惚れてるんだ。そう来ないと面白くねえ——  
またしわがれた声が出た。紺野がいつのまにかぼくの傍に佇っていた。そのことはぼくの呼吸を止めた。そのことばの醜い反響がぼくの全身から全ての力をしぼり取るように起つた。ぼくはしびれるような恥かしさと——それは昔、甘い陶酔のリフレインの中で味つたものではなかったか——怒りにふるえた眼で虚空をみつめた。ライトのやわらかな光が何かこの場にそぐわないもののようにぼくの眼に映じた。

——どうだ、あいつもなかなか見られるじゃないか、カタパン君——

カタパン？ カタパン！ ——何という嘲けりのこもつたことばだろう。ぼくはカタパンじゃない。それに……そう——ぼくは上原園子を愛している。やせ細つた骨でぎしぎしときしむような少女——

(どうだ、あいつもなかなか見られるじゃないか)——冠をかむった少女よ! ぼくは「あいつ」を眼の前にして罪を犯そうとしている。ぼくは「あいつ」を愛している。けれど、いやそれにもまして、ぼくは本当は好色漢なのだ。「あいつ」をぼくの欲情にとがった齒にかけて、「あいつ」の体液を味おうというのだ。誰にも知られずに欲情の炎を燃やしつづけている——堅いパンの外殻がいかくの内部で醗酵はっこうを続けているこの秘密のよろこび——ぼくは本当は好色漢ではないのか?

破廉恥な罪の想像がぼくの全身をしびれさせた。それはよろこびであった。一つの大きな戦慄を伴った歓喜の叫びであった。

O! Great Sinner!

叫びは反覆され、そのリフレインの中であつての幼い日の自分と現在の自分とが醜く重なり合つて映つた。甘さの中で顔を火照らせ、何かを待ちもっている姿勢を——苦惱と歓喜の交錯の中で罪を犯そうとする眼を——ぼくははつきり認めていた——何か貴重なものを一刻一刻失つて行く自分を——失うことにむしろ歓喜を覚えている自分を——。

O! Great Sinner!

涯しなく続く映画のようであつた。

少女の像は極度にゆがめられ、彼女もまたこのよろこびに浸っているかのように見えた。そのゆがみが更にむしろ醜悪なまでに長くのび上つたとき、薄ぼんやりした意識の中で、ぼくは——いや、彼女自身が叫びつづけていた。

——犯せ!

画面は急に動き始めた。暗い無限に続く映画であった。彼女の像をあの醜い顔が勝利の叫びをあげて侵して行つた。それは紺野の脂ぎつた顔でもあり、ぼく自身の欲情に濡れた表情でもあつた。その皺は老婆のそれでもあり、姉のその笑いは傲慢な微笑でもあつた。それらは一樣に小刻みに動いた。ふるえながらまた一つの像に集つて行つた。臃ろげな輪郭が、かすかにふるえる幾本かの線が一本の線に集り、背後の闇は更に深くなつた。それはまた母の顔であつた。悔恨に打ちひしがれた——けれどもどこかに欲情をとどめた顔であつた。口にはあの奇妙な薄笑いを浮べて、母は何かをぼくに語つてゐるようであつた。暗い懺悔室の内部で、卑しいことばを、冒瀆に満ちた言葉をぼくにぎさやくようであつた。

画面は更に動きを速めた。いくつかの影像が現われては消え、いくつかの叫びが断続してつづいた。次第に画面は暗く、やがてはただ焰の影のようなものを残しながら、影像は一つ一つ消えて行つた。

——溶暗。

ぼくはつかれきつた意識の中でなおなにかを求め、何かを待ちつづけた。画面は次第に薄れて行つた。何か物憂い響きが、地の底から響いて来るようであつた。ゆつくりしたそのリフレインが、ぼくにまだ夢を見つづけているような錯覚を与えた。それは波の音であつた。次第に意識がめざめて行くにつれて、その響きもまた、現実味を帯びた神経質なさざめきに変つた。いつのまにかもう朝が来ているのだつた。ぼくはしばらく体をかたくしたまま動かないでいた、両眼を閉じて。まだなにか幻影を求めめるかのようにその波のひびきに聞き入つていた。薄明るい光が両眼一ぱいに拡がり、夢の終結を

告げていた。けれどそれはまた新しい映画の開幕のベルでもあつた。そのベルは湿気を含んだ壁の向うから低く陰気にひびいた。それは弱々しい断続する母の咳せきであつた。もうぼくははつきりめざめていた。

ぼくは眼を開いた。暗灰色の空が、時の流れを堰せき止めてしまふかのように、白く凍つた窓一面に拡がり、時には冷い風を吹き降した。所々傷痕のように穴をあけた襖ふすま、汚れたすりきれてしまつた畳、そして妙に明るい色彩の注射箱。

母の咳はまだ続いていた。ちやうど、過去のものを一つずつ振り離して行くように、或る時は強く、或る時にはほとんど聞えなかつた。それが海のひびきに和して奇妙な階律になつた。ぼくはやつと起き上つた。何時だろう、寢床に横たわつたまま、やせさらばえた腕をくんで母は窓から空を見上げているのだろうか。すき通るような皮膚の色がむしろここでは唯一の生氣あるものだ、——何を考へているのだろうか——そして何時母の幻想は終りを告げるのだろうか？ 華やかな舞踏会の場面で、熱烈ほつに抱擁ようを続ける二人の愛撫で、或いは雪の上にひざまずく哀れな少女の姿で、それとも神に懺悔する老いたる牧師の言葉で母の映画は終りを告げるのだろうか？ 流れるような画面が次第に暗くなり、画像が何か一步、一步、永遠の方へ波うつように遠ざかりながら、突然——本当に突然——太い三つの文字が記録される。

《END》そして《FIN》と——

もうお終しんいなのです——

もうお終しんいなのさ——

観客は誰一人もはや画面をふり返るものもなく、忘れていた用事を思い出したかのようにいち早く座席をたつて行く——そう、一刻でも早くこの幻想の場面から逃れようとして、外気の中で自分の存在を確かめようとして、友の名を呼び、恋人の腕をとつて外へ出ようとする——むしろ何でもなかった顔つきで他愛ない話に打ち興しながら。今さつきまで主人公の運命に涙を流した女は——いいえ、何でもないんだわ——と自分に言い聞かせながら素早く涙をふいて笑顔を夫に見せる。男は敵役に対する憤りをかくすように、妻に笑顔で答えてみせる。——ねえ、今晚はパウリスタにしない——彼らはこんなことを言い合いながら腕をくんで出て行くのだ。たがいの心の内部でちぐはぐな感情を持って余しながら、強いて冷静な表情で——。

こうして映画は忘れ去られる。人たちの心の中で、幻想の画面は次々に薄れ消え去つて行く。後に何が残るだろうか？ まして誰がああ象徴的な三文字《END》《FIN》を覚えているだろうか？ 明るい現実のイルミネーションの下で、すべてが忘れ去られた後に、ただ次のようなことばのみが残されているのではあるまいか？

——ああ、あれね、あれは《面白かったよ》

——いいや、《つまらなかつたぜ》

その漠然とした価値判断が墓碑銘のようにきざまれ、次の世代へと伝えられる。三十年の後に、誰がああ映画の最後の場面——それが立派で印象的なものである外は——例えば高僧の厳かな死とか、詩人の詩的な最期とかの外は——を覚えていた人があるだろうか？ ましてあの三つの文字を——。

それは突然やつて来る。ある程度の前触れは予見し得ても、その文字の現われる瞬間を誰が正確に

予見することが出来るだろうか？

もう母のそれが迫っているのではないか？ もう観客席の間からさえも早く終らないかという声がり起つて来ているのではないか——人々はもう座席から立ち上ろうとしているのではないか。《つまりなかつた》というざざやきを残して。

ぼくは突然ギクリと我に返つた。母はいつのまにか向き直つて枕もとでぼくをみつめていた。

——あの夢の中の顔、蒼白な打ちひしがれた、けれどどこかに欲情をとどめた顔であつた。それはまた、冠の少女の顔ではないか。《似ている》——そのことばは天啓のようにぼくの全身をやわらかく包んだ。ただそれのみがあたかも暗い世界からの唯一の抜け道であるかのように、ぼくの姿勢はその方へ崩れ落ちて行つた。

——英夫さん、神さまは今どうしていらつしやるのでしょうか？

それは予期しない奇妙なことばだつた。母はただそれだけを口ごもりながら低い声で、まるで友達が何かのことを噂する<sup>うわさ</sup>ように、この予言者じみたことをつぶやいたのだつた。その響きの中で何かガラガラと音をたてて崩れ落ちて行くようであつた。足もとの砂が次第に崩れ始める——一粒一粒の砂の構成がゆるみ、いつのまにか全体が滑り始める——そんな瞬間に自分が佇つたのを感じた。ぼくが今しがた得た小さな安堵<sup>あんど</sup>はその流れにおし流され、意識のくらがりの向うで粉々になろうとしていた。

どうしたと言ふのだろうか？ 母は何故こんなことを、言い出したのだろうか？ けれどぼくには、母の言いたいことが判る<sup>わか</sup>ような気がする。もしかしたら、母は田原さんのことを言っているのかも知れ

ない。もしかしたら、あの田原のことを言おうとしているのではないか？ 田原一氏のことを、姉の夫である田原牧師のことを――。

あれ以来、母は神を見失ってしまったのではなからうか？――ぼくにはそんな感じがする。母の《神》は永久に母をすてたのではないかと――。

いくつかの断片フラグメントが流れ始めた。

それは、神の僕しもべの敬虔けいけんな祈りの表情でもあり、熱烈に行動を説く彼のプロフィールでもあり、あるいは見なれた姉の夫の世帯じみたポトレエトであった。どこかそれは姉に似ていた。傲慢な微笑を浮べてぼくと母とをみているようであった。そして、その田原は姉と共に、永久に母を残したまま立ち去ってしまったのだ。どこへ？ おそらく母の今まで知らなかった、また永久にこれからも知ることのない《新しい世界》へ――姉と共に――そして母とぼくをのこして――。

――それにしても一体「神」はどこに行ってしまったのだろうか？ 「神」はもうどこにもいないのではないか。幼いとき、日曜学校のベンチの上で、或いは田原さんの膝の上できいたやさしい《神さま》はもうどこにもいないのではないか？

――あなたはどこへいかれたのか？ 知らぬ間に、形を変えてしまわれたのか？

――どこにも、天国にさえ、「神」はいないのではないか？

――いやその天国もまたぼくらの知らない間に、《新しい世界》へ移ってしまったのだろうか？

みんな変ってしまった。田原さんも姉も母もそしてぼく自身も――いつのまにか《新しい世界》が創造され、《新しい神》がつくられたのだろうか？

ぼくには判らない。少しも判っていない。あれ以来——《あれ以来》——ぼくには何一つ判っていない。みんなはうまく事柄を説明してすませている。大人たちはみんなそうなのではないか。理窟りくつと経験できれいに物事を割りきってみせる。けれどぼくは大人ではない。ぼくはただあらゆるものを本能で感ずるのだ。ちょうど犬か何ぞのように、鼻をならし、異った風向に耳をたてるのだ。たしかに別の匂いが、別の風が——おそらくは《新しい》何かが——ぼくと《神》の間に入りこんで来たのではないか？

ひさしく待ちにし　　メシヤよくだりて

みたまのなわめを　　ときはなちたまえ

主よ主よきたりて　　みすくいをたまえ

あれは暗い会堂の内部であった。まだ幼稚園に通っていたぼくの横に、母は手をくんで坐っていた。始めて入った会堂の冷んやりとした空気に圧倒されてしまったかのように、ぼくは《二葉幼稚園》の字の入った水兵帽をぐるぐるまわしていた。ぼくはそのミッシェンの幼稚園に通い、時にはこの日曜学校に出席していたし、また近所のカトリックの教会へも時々しのび込んだこともあったので、何かぼんやりと聞き知っていたのであった。イエス様や十二使徒たちの紙芝居と共に、いくつかの聖歌と共にたのしいノエルの夜のことをぼくは知っていた。

そのノエルが近づこうとするある日曜だった。オルガンの響きがこのせまい会堂一ぱいに反響した。ぼくははつきり記憶している。人いきりで白くなった窓を通して、暗灰色の冬空が雪を降らしたのを——。けれどもそれは少しも美しくなかった。ただ冷そうに向うの原の材木置場にまばらに降りつもつ

て行くようであつた。いつもは優美な曲線を見せる生駒山いこまやまの姿もかき消されたように見えなかつた。

あしたのほしなる      メシヤよくだりて

おぐらきせかいに      みひかりをたまえ

主よ主よきたりて      みすくいをたまえ

その長音の旋律が会堂の壁に反響してわんわんと鳴るようにひびいた。そこからはや逃れられなように、それはぼくの全身を包んで行くのだった。せまい暗い陰気な会堂であつた。わずかに30人ばかりの人たちが、古びた堅い腰かけにかけていた。ぼくは突然寒々としたものを感じた。子供が本能で感ずる何か寒々としたものを——。みんなはしばらくひざまずいているようであつた。スポンジの膝あての上で、ぼくはしきりに身を動かした。そのとき、田原さんが始めてぼくの世界に現われたのだった。若い牧師補だつた。神学校を出たばかりといった感じのやせてはいたがエネルギー的な青年——ぼくにはそんな感じがしたのだった。祭壇の横の椅子いすから身をおこして、説教壇の方へ靴音おとを鳴して近づいて行つた。けれどぼくは彼が何を話したかまるで覚えていないのだ。ただ彼の金縁ゆがねの眼鏡が何か冷い印象をぼくの心に印した他は——その印象は、ぼくが田原さんに可愛がられるようになってからも消えなかつた。そして今ぼくは、はつきりその印象を再び田原氏に認めるのだった。聖書を読む田原さんの声はどちらかと言えば低く、悪くすれば聞きとり難かつた。白いカラーが窮屈そうに彼の顎あごを支えていた。

突然、またオルガンが鳴り出した。もうみんなはひざまずき、母は祈禱書きとうしょを取り出して、ぼくに指でそのページを指し示すのだった。その祈りの声が最高潮に達したとき、ぼくは母が自分から離れ

去って行くのを感じた。永遠にもはや取り返しのつかない方へ、離れ去って行くのを感じたのだった。そしてぼく自身の内部でさえ、何かがぼくを残して離れ去り、何か近づいて来るのを感じた——それがぼくの「神」だったのだろうか？

ぼくは疲れた気持で会堂を出た。ぼくは急に恐しくなって、暗い階段を走った。教会の外ではまだ暗い雪が降りつづいていた。ぼくはふり返って母を呼ぼうとした。そのときぼくの心の内部にいつのまにか深淵しんえんが掘られ、自分がその断崖だんがいのふちに佇ちすくんでいるのを感じた。ぼくはそれなり雪の中に立ちつくしていた。

その深淵は思わぬときに口を開いた。

ぼくはそうして母と教会へ通うようになった。姉も、いやいやながら再び通い出し始めた。ぼくはむしろ教会へ行くのが好きであった。清子さんも時々来ていたのだが——いやそんな理由ではなくて——それもたしかに一つの理由ではあったが——ぼくはこの暗い内部が好きだったのだ。この中では人は容易に《ひとり》になれる——ひとりびとりがばらばらに分解され、あらゆる約束から解放されるのだ——そしてここではみんながぼくから離れて行く——いやぼく自身でさえぼくから離れて行くのだ。

ぼくは田原さんと親しくなった。田原さんは見かけに似ず親切な人であった。ぼくを抱き上げ、静かにぼくの体をゆすぶりながら、小声で語るのだった。イエスさまのこと、パウロさまのこと、三人の博士のこと——そして母のこと、家のことをも——。ぼくはもう教会行を止めることは出来なかつ

た。その頃、父——父のことは後で話そう——はよく日曜には教会へなんか行かずに、どこか野原へでも連れて行けとよく母にどなるのだった。けれどぼくはあの暗い内部の方がよほどよかったのだ。野原の真中で、また、海辺でぼくはぎらぎら輝く日光に怖れおそわななくのだった。余りに明るすぎる色彩が、ぼくの眼を混乱させ、新しい空気がぼくの肺をつまらせるようにぼくは感ずるのだった。あの黝んだ煉瓦色れんがいろや、すえたような漆喰しつくいの香がぼくには適していたのだった。そして教会には田原さんがいた。ぼくは彼を心から愛し尊敬するようになっていた。

——田原さんのようになるの。

何になるかと聞かれたとき、陸軍大将と答える代りにぼくはきまつてこう答えたのだった。田原さんはぼくを抱き上げ小声で話しながら、母の方をじつと横眼でうかがうように見るのだった。母はその視線を意識するかのように、強いて冷静な表情で祈禱書をひもどくのだった。母の来ないとき、田原さんはそれとなくぼくに母のことをたずねた。

田原さんの評判はよかった。前の信望を集めた老牧師の死の後でもあり、田原さんの地位は危あやぶまれたのだが、彼の才能と気力はそれをうまく切りぬけて行くようであった。人々は、始め彼を好奇の面持ちで、後には尊敬の念をもつてうわさしていた。ぼくと母の間でも、無論このことは暗黙の中に通じ合っていた。ぼくと母はただぼくらにだけ判る方法で田原さんのことをうわさし合った——視線と視線がふれ合う瞬間にはもう田原さんのことが話されていた。母もまた、田原さんのことをそれとなくぼくにたずねるのだった。少しずるそうな表情を浮べて膝のあたりで両手をくんでたずねるのであった。ぼくはそんな母が好きだった。

姉は田原さんが大嫌いだいいきらいであつた。姉は気性の激しい好き嫌いののはつきりした女だつた。小学校時代から姉にはそんな面が、気まぐれな一面と共にあつたのだ。清子さんと絶交したのもそのためだつた——ぼくは幾日の間、このことで苦しんだことだろう——ぼくは姉を憎んだ。憎みつづけた。その姉が田原さんを嫌つたのだ。何故嫌つたか、彼女自身でさえ説明出来ないかも知れない。けれど、いやひよつとしたら今でも姉は田原さんを憎みつづけているのではあるまいか？

この奇妙な教会行は休みなくつづけられた。田原さんはまだ独身だつた。教会の傍の小さな家に入人の年老いた下男と共に住んでいた。ぼくはもう自由に出入を許されていたのだつた。いつのことだつたらうか？ もう小学校の三年位になつていたのであるうか——或る日、ぼくは勝手知つた玄関に入つて行つた。田原さんは不在だつた。ぼくは田原さんの書齋で、寝台兼用のソファに坐りながら、しばらく待ちつづけた。幾冊かの本が積まれてあつた。その中の一冊を何気なくぼくが取り上げたとき、一枚の紙片が舞い落ちた。慌あわててぼくはそれを取り上げた。それは一枚の写真だつた。ワンピースを着て若やいで見える母の写真だつた。見憶えのあるいつも母のアルバムで見なれた写真だつた。

——どうしてこんなものがあるのだろうか？

何気なくそう思いながら裏返したとき、ぼくはハッと息をつまらせた。何かくずして書かれてあつた。ほとんどそれは判らなかつたが最後の

田原一様に

笹木良子

という字がぼくの網膜一ぱいに拡がつて行つた。母の署名ではないか——ぼくには全てが判つたような気がした。今まで意識の底にひそんでいたあるものが、この一瞬に爆発し拡がつて行くようであつ

た。それはかつて、ケツコン・コンケツということばをくり返した時に味つたものであった。

ぼくは急いで家へ帰った。アルバムには無残にはぎとられたあとが残っていた。ぽつかり口を開いたその深淵——再び自分がまた、その断崖に佇っているのを感じた。深淵は底知れない闇やみを形成していた。その闇の中で母のぼんやりした影像が、うごめきつづけているようであった。

けれど、ぼくには何一つ判つていなかったのだ。母のことも田原さんのことも、そしてそれからの自分達の運命についても——。どうにもならない深淵がぼくらを待ちかまえていた。ぼくたちのあらゆる運命を一挙に葬り去ろうとする大きな深淵——ぼくの小さな深淵も、母のそれをも、あらゆる人間の小さないとなみを、小さなよろこび、かなしみを、一挙に葬り去ろうとする歴史の深淵が口を開いたのだった。ぼくらはずると次第にその中へひきずり込まれて行つた。世界がゆつくりと深淵の中へ、燃える火焰かえんに包まれて落ち込んで行つた。

その朝も、ぼくはいつもと同じように近くの寺の境内けいだいへ行つた。その頃、ぼくらは決められた各班ごとに整列して登校した。班長の高等科二年の愚鈍な眼つきをした東が、みんなに何事かを話しているのだった。

——戦争が始まったんだよ、交戦状態に入ったんや……

ぼくにはむしろ不思議な気がした。どこのどいつが戦争を始めたのだろう——ぼくはそんな表情で、東の大きな身体を見ていた。けれどぼくらはもうそんな予感を前から抱いていたのだった。新聞も読めないぼくらは大人の話の切れはしから、本能で何かを感じるのだった。何か不気味なものが近づく

のを、戦慄と共に秘められた歓喜の情でそれを感じるのであった。いつか防空絵本で見た空襲の光景がぼくらの胸をあやしくかき立て、日の丸弁当と旗行列の戦争とは異った何か新しい戦争がおぼろげながらはつきり形を示して来るようであった。けれどぼくらは陽気だった。ぼくらはあこがれの眼で兵隊さんを見、口々に軍隊について、ことに飛行機について語った。けれども、いつの頃からか——これはぼく自身だけに限られたものだったかも知れないが——何か暗いものが荒々しく足音をたてて近づいて来るように思えたのだった。今までの絵本に描かれなかった、「海鷲<sup>うみわし</sup>猛爆」のグラフィ集に見られなかったものが、白紙に落ちた一点の汚点のようにたちまちぼくの心に<sup>ひろ</sup>拡がって行くのだった。ぼくにはそれが何であるかは無論判らなかった。けれど全身でぼくは感ずるのであった。ぼくはむしろ戦争を欲していたのかも知れぬ。新しい戦争が、大人の誰もが夢想したように、何もかも一挙に解決する——ぼく自身のこの汚点をも一挙に解決すると信じていたのであった。

暗い予感としびれるような期待を抱いて、ぼくは戦争を、新しい戦争を待っていた。けれど、東のこのことばを聞いた瞬間、ぼくは何故<sup>なぜ</sup>かそれを遠い国の出来事のように感じたのだった。余りにそれが早く来てしまったためだろうか——何故かそれがぼくの夢想したものと違うものであることを感じていた。ふつとぼくの幼い意識は思うのだった。——すぐ終るだろう。何事もなく、今まで幾度かあった国境紛争のようにすぐ終るだろう。けれど、それはすぐ終らなかつた。確かにぼくの期待し予想した——おそらく大人たちの期待し予想した——ものとは全く異つたものであつた。誰もがかつて経験したことのない悲惨がぼくらを待っていたのだった。もうそこには日の丸弁当も旗行列もバケツ・リレーも無かつた。あるのはただ燃えさかる火焰のみであつた。その火焰の中へぼくらは一人ずつ投げ

込まれて行った。

その戦争というおぼろげな実体がぼくに具体化したのはある日のことだった。いつもの通り、ぼくらは境内の大銀杏おおいちようの傍に集り、軍艦マーチなど口ずさんでいたのだった。そのとき、東が突然言い出したのだ。

——お前とこキリスト教やる。あれはアメリカの神さまやつて先生が言うてられたぞ、お前はあのアメリカ人みたいにいつもひざまずいてるんか？

東の愚鈍な眠そうな表情に、はつきり、憎悪の炎が燃えさかるのをぼくは認めた。あの「昼行ひるあん燈どん」と嘲笑されたむしろ柔和な表情が、憎々しげにぼくを見ているのだった。その彼の視線に堪えられないようにぼくはうつむいた。

——いいや、そんなことない。

ぼくは何を否定しようというのか？ ぼくはうつむいたまま低い声で答えた。ぼくは田原さんの顔を想おもい浮べた。イエス様は何国人だったのだろうか？ たしかアメリカ人ではなかったはずだ。ぼくの体は次第にふるえ始めた。

——お前とこは非国民や、みんなそう言うてるぞ——

東のお付の少年がそう毒々しげにつぶやくのだった。ぼくには全てが判らなかつた。非国民とは酒をのんで暴れまわる人たちのことをいうのではないか——たしか学校の横にはられたポスターにはそんな絵が描かれてあつたのだが——ぼくも非国民なのだろうか？ 酒をのまないでも、暴れまわらなくともぼくたちは非国民なのだろうか——母も田原さんもぼくも？ それでは父はどうなのだろうか？

毎晩、酒を飲んで帰つて来て母と口論を続ける父は——キリスト教をくそや、そとののしる父は？

——スパイヤ、スパイヤ。

みんなは口々に言い出した。

——讚美歌いうたらあれスパイの歌やぞ。教会に来るあの外人にお前ら、秘密を売るんやろ！

ぼくたちはまたスパイなのだろうか？ 黒メガネをかけ、マスクをして、ピストルを手にしたスパイなのだろうか？ そしてあのフリーデマンさんは、スパイの親玉なのだろうか？ あの優しい、口髭を生やしたフリーデマンさんは、ぼくを大きな手で抱きしめてくれるフリーデマンさんは？ ——けれどあの人はドイツ人ではなかったのか？ ——ドイツはぼくらの友邦なのでは？ ぼくには何が何だか判らなくなった。幼い頭脳の中でぐるぐる大地が廻り出すようであった。ぼくはそれなり泣いてしまった。しばらくみんなはそれを小気味よげにみつめていたようであったが、ぼくが泣きつづけていると、ぼくの肩に手をおいた東が分別くさい調子で言った。

——もう泣くな、おくれるから行こう。

ぼくが再び顔をあげて、東の顔を見上げたとき、その表情からはもうあの憎悪の色は全く消えていた。相変らず眠そうな愚鈍な表情で、ぼくに媚るこびように眼を細めるのだった。

——一体彼をそんなにまで憎悪にかりたてたものは、ぼくを非国民、スパイと言わしめたものは、あの柔らかな彼に浮んだ憎悪の念は、それは一体何であつたのだろうか？

——先生は強制するんじゃない。けれど笹木、日本は今、のるかそるかかの非常時なのだ。みんな丸坊主になつてこの難局にあたるんだ。いいか、判つたか。

白髪の交った先生の短く刈った頭を見ながら、ぼくはいよいよあの怖い感じが何か形をとって迫って来るのを感じた。ぼくの髪——それは女の子のように長くのばされ、きちんと鋏はさみをあてられていた——けれども、ぼくのちぢれ毛はどうかすると、ちょうど、パーマネントウェーブをかけたように見えるのだった（このことをぼくはどれだけいやがったことだろう。みんなに「やーい女、女にくさつたやつ」と言われ、「雀すずめの巣、雀の巣」と言つてはやされ、その髪の毛をつかんで引き倒されたこともあつたのだつた）。そしてむしろ、ぼくは丸坊主になることを欲していた。母にそれを幾度頼んだことだろう。母は許さなかつた。毎朝、母は丹念にぼくの髪に櫛くしをあてるのだつた。このことがまた父と母との口論の種になつていた。——日本男子はもつと男らしくしろ——。ぼくはむしろ先生にそう言われたことを喜んだ。けれどもそれを母に告げたとき、母は悲しげに目を伏せたまま黙つてしまふのだつた。翌日、ぼくはそのまま刈らないで学校に出た。国語の時間であつたらうか？ 先生は突然読むのを止めて、怖々かくれているぼくの名を呼んだ。

——笹木、何か忘れたものはないかね！

ぼくは大急ぎでカバンを調べた。

——ありません。

——何ッ！ ないことがあるものか、頭に手をおいてみる！

先生は憎々しげに叫んだ。それは東のそれとおなじものであつた。頭へあげたぼくの手には、ぼくの頭髮がやわらかく触れた。それは何かこの場にそぐわない——戦争にそぐわないやわらかさだった。みんなは物怖ものおじしたように、ぼくと先生を見比べていた。

——明日、刈つて来るんだぞ。

ぼくはむしろこの年老いた先生が好きだったのだ。この先生が何故東と同じように怒るのだろう、なぜぼくを憎まねばならないのだろうか？ 結局ぼくは二、三日後、丸坊主になった。母の夢想していた貴族の坊つちやんは、東や他の者たちと同様に戦争ごっこに旗を持って走りまわらなければならなくなったのだった。父はその夜、常に似ずきげん機嫌がよかった。

——よう坊主、いよいよ男になったなあ、もう女の子みたいにくくそそややその前でめそめそ泣いたらあかんぞ。

父は言いながらさかすき杯さかすきに酒をついで、ぼくの口に無理やりに流し込んだ。味ったことのない感覚が全身に拡がって行つた。これが男の感覚なのだろうか？ 日本男子の？——ぼくは火照つた顔をあげて父を見た。父の高笑いのなかにぼくは、はつきりと同じもの——東や先生の憎悪と同じものを認めていた。——それは一体何なのだろうか？ 何か容易ならぬ事態が刻々に近づいて来るようであつた。いやもうそれはぼくらをとえはたえ十重二十重にとり囲み始めていたのだつた。

神がぼくを見すてて行くかようであつた。ぼくは始めて完全に神から離れてしまつた自分を感じた。それはぼくにとつて田原さんとその教会から、田原さんの大きな骨ばつた手から、イエス様の受難像からの——いやそして母からの脱落——いや訣別けつべつを意味した。

ぼくは二つのこと——人を憎むこと、殺すことを学んだ。自分はそうしたくなくても、そうせねばならないことを学んだ。この世界には鬼が住み、鬼を殺すことは正しいことだと知つた。ぼくらは木

刀を持ち勇しく突撃して行つた。小学校四年生の小さな身体に憎悪を燃えたぎらせ、ぼくは重い木刀をふりかぶつた。いくつかの幻影に向つて——多分、鬼のような表情をした巨大な外国人の肩へ——やさしいフリーデマンさんの広い肩へ、田原さんの神経質な額に、母の蒼白い頬へ、真新しいセーラー服を着た清子さんの小さな身体に向つて——いや、そして女のように髪を長く切りそろえた自分自身の幻影に対して——あいつらはみんなスパイなのだぞ、しつかりしろ、女のくさつたやつ——ぼくは一撃を振り下した。

——笹木良子、お前は非国民だぞ。

——田原一、お前はスパイだな。

そしてぼくはこの残忍な空想に耽るのだった。二人を呼び出し、ぼくはその前で叫んでやる。

——かくしたつて駄目だぞ、神さまがみんな見ておいでだ！

だがその神さまとは誰なのか？ 一つのまにか新しい神が登場していた。愛と平和の神、それは女の子の好むものだ。しつかりしろ、おれは日本男子なのだぞ。荒々しい神の出現であつた。

——殺せ、憎め！ 女のくさつたやつ。

その神はこう幾度もくり返すのであつた。全てが狂気の嵐に吹きなびかれて行つた。ぼくの感情の中で、その憎悪の念は日に日に大きくなって行くようであつた。

教会は段々圧迫されて行つた。けれども母はまだ日曜には通つていた。もうぼくも姉も全く行かなくなつていた。母はめつきり老い込んだようであつた。

戦争は日に日に大きくなり悲惨の度を加えた。何にも知らないぼくらにさえそれが判るのだった。

やがてぼくらは大阪を離れた。事態はもうそこまで来てしまったのだった。その後の生活は何処も同じ集団疎開の悲劇が展開されたのだった。日にわずかの食をあたえられながら、戦争のかくされた半面をおぼろげながら知ると共に、ぼくの憎悪はもう反対に減じて行くばかりであった。一人人は何のために戦うのだろうか？——

その疑問を抱いて小学校卒業と共に、ぼくは大阪へ帰った。その翌晩、あの空襲がぼくらを襲ったのだった。恐怖と戦慄の一夜——ぼくらはどう過したのだろうか——ともかく無事にぼくらの家は焼け残った。それが新しい神から受けた始めての洗礼だった。その五日後、この暗い世代の或る者たちは中学生になったのだった。ぼくもまた焼け残ったK中の門をくぐった。

けれども、その神は二度目の洗礼を与えた。六月の或る午後、ぼくは母を抱くようにして逃げのびた。火焰がうずまく暗闇の中をぼくは走った。何もかも終りなのだ——すべてが死んでしまったのだ——神さまも、女のくさった奴も、新しい軍神も、すべて終りなんだ——汚水の中に二人で入り乍らぼくは感じていた。芦屋の親戚の家に落ちついてぼくらは姉の来るのを待っていた。その日姉もまた動員先のパラシュート工場で、この戦火にあつていたのであった。姉は来なかった。何人かが姉を探しに出かけた。母は、疲労と心配で半狂乱になり、寢床についていたのであった。もうみんなが絶望しかけたとき、姉は夕方、しょんぼりとして来た。真黒な顔に顔中ドス黒い縞帯をまいて、姉はへたへたと母の枕もとに坐るなり泣き出したのだった。虚脱した状態がしばらく続いた。姉は教会の焼けたことを半ば自分に説き聞かすように話した。——田原さんはどこに？ 母の聞きたいことがぼくにはよく判るのだった。姉は強いて冷淡な調子で、それに触れずに、他のことをしゃべるのだった。その姉の

様子から、おそらく、田原さんは無事だったに違いないと感じた。もしものことがあれば片意地な姉はそれを言い出すに違いないから——あの傲慢な微笑を浮べて——。またもや三人の心が、ばらばらにほぐれていくようであった。

敗戦一年目でぼくらは田原さんを訪ねた。元の場所に小さな仮小屋を建てて住んでいるのだった。礼拝のために近くの病院の一室を借りていた。驚きと歓びの一時の後、ぼくは何故か田原さんが変わったのを感じた。どこが変わったのだろうか？ あの神経質な額も、金ブチの眼鏡も、骨ばった大きな手も、すべてが同じだ。けれど、どこか異なっている。どこかぼくらから手のとどかない遠いところ、というより別の世界にいる彼を感じた。そしてぼくにはそれが全てを決定するもののように思われた。それから後のぼくらの運命をも——。

母はまた芦屋から大阪の教会へ通い出した（ぼくらは芦屋の海岸の薄汚い一角に一軒の家を借りたのだった）。けれど始め楽しそうだった母の顔が、再び元の土色に戻って行くのだった。何かが起ったのではないだろうか？——ぼくは或る日、教会へ出た。田原さんはちょうどそのとき低い声で彼の説教を終ろうとしていた。

——今多くの人たちは苦しんでいます。みんなが今、死に瀕する苦しみを味わい、その苦難と絶望の中に、神を忘れた自暴自棄の生活を続けています。一步、外に出れば、一体、私たちは何を見るのでしょうか？ 飢えに苦しみ、職を求めて右往左往する人たちの姿も、街の片隅に見かける浮浪児の姿も、決して別世界の事柄ではありません。私たちもまた、その渦中にいます。この絶望と苦難

の垣かきの中なかにいます。このことを、私たちは忘れてはなりません。では、一体それは何から起つたのでしょうか？ 何が原因なのでしょう？ 答は他ではありません。私たちの犯した罪ではないのでしょうか。そうです、それは罪なのです。戦争に全ては発しているのです。では誰がこの戦争をひき起したのか？ この間を私たちは私たち自身に向つて為さなければならぬ。私たちをおいて他に誰があるでしょう。たとい、私たちが直接進んでそれに加わらなかつたとしても、それは私たちなのです。そして私なのです。私はここで、あなたの前にひざまずいて許しを神に乞こわねばならない。私はここで懺悔ざんげしなければならぬのです。その罪悪を阻止するために、ほとんど何ごとも私はなさなかつたのです。私は一種の忌むべきオポチュニストなでした。が、今となつて弁解はやめましょう。——私、そしてまた全キリスト者が、戦争を阻止し平和を守り通そうとしなかつたのは、何と言つても、罪を犯したのと言えましょう。私たちは罪を犯しました——私たちは罪を犯したのです。

……

そして、今また第二の裁判の時がやつて来ています。再び、私たちは私たちの無力を言い、その無力という迷路の前に再び罪を犯すべきでしょうか。時は今しかないのです。私たちは立ち上らなければならぬのです。——前の罪の償いのためにも——。私は、私たちもまた、この絶望と苦難の垣かきの中なかにある、と言いました。これを、単に神の御試煉であると片づけていいものなのでしょうか？ 私たちはあらゆる可能の手段をつくさねばなりません。神の国は与えられるもの……いつのまにか自然に生れるものではなく、人の努力によつてのみ築きあげられるものだと思います。いや、私はむしろ、ここでそれはかち得るもの、闘いとるものだとまで極言したいのです。私たちの生活を苦しめて

いる者たちの手からそれを闘いとるのです。私は今はつきり告げたい。これら死に瀕する下づみの人たちのために闘うと。……私は今幾度も闘うということばを用いました。そうです。私たちは今、闘わねばならない。現在の社会悪に対して、不正に対して、断乎だんことして闘わねばならない段階にまで達しているのです。私が申しました社会悪や不正が具体的に何を指すか、また私の言っていることが何を指すか、おそらくお判りになつていられることと思います。今、問題になつている日教会の牧師のことも、私たちは深く考を致さねばならない問題なのです。それは彼だけの問題ではなくて、全キリスト者、私たちすべての問題なのです。

神を求めるためにどうすればいいのか？ おそらく、いろいろな解答がなされるでしょう。それはみな正しいことなのです。けれど、今私たちは更に、私たちの現実の世界を、飢に瀕している労働者、農民、中小商工業者があえぎつづけている、そして新しい戦争が起らんとしているこの現実の世界についても同時に考えなければなりません。先ず、私たちはたのしく住める、共に神をたたえ不安なく生活の送れる楽園を建設せねばなりません。このために、私はいかなる協力の手をも、それがいかなる陣営からのものであつても、それを拒もうとはしないつもりです……

軽い動揺が食堂の中を占めた。いくつかの田原さんの像が、田原さんの昔のことばが切れ切れにそれに和した。ぼくの幼稚な頭にもおぼろげながら判るような気がした。けれどある漠然ぼくぜんとした不安がぼくの心を占めるのだつた。田原さんは、あの「神」をすて去ろうとするのではないか？ ぼくに眼を細めて語つた「神」を。——今田原さんが語つた神と、それとは確かに同じものだ。けれど、どこか異つている——ぼくは本能的に感じていた。ぼくの「神」はどこか違つた世界へ移つてしまつた。ぼくの

手のとどかない、別のおそらく《新しく》形成された世界へ、「神」はお移りになってしまわれたのではないか？——乱れた頭の中でぼくはこの問をくり返した。

そのとき田原さんがぼくの後方の何かに向って眼で合図したようだった。ぼくはふり返った。姉のむしろどす黒いといつてよい顔が、何故か火照った表情でそれに答えているのであった。姉がここに来ている——田原さんを嫌い、神をせせら笑った姉がここで田原さんの合図に答えている——姉はここで何をしているというのだ？ ぼくの血液が逆流し始めた。ぼくは視線を母に移した。母は素知らぬ顔で、膝ひざの上の祈ひま禱書をしきりにいじっていた。——ちょうど、昔田原さんに抱かれたぼくの傍でそうしたように。

……姉が田原さんと結婚したのはそれから半年位後のことであつた。田原さんはより荒涼とした築港の教会の方へ移った。労働者街の真中で彼は活動を開始した。一方、自宅をあの埋立地せきたんがらの石炭殻せきたんがらの上に建て、姉も無論、そしてぼくも通学の便宜からそこへ移った。

母はその前から床についていたのだつた。肺結核の診断を受けた母はもう動くことも出来なかつた。幾度か喀血かっけつがくり返された。母には看護婦がつけられ、ぼくと姉は交る交る芦屋に出かけて行つた。ぼくの家の何もかもが崩壊に瀕していた。家計の点でも田原さんがいなくなつたら、もし姉と結婚してくれなかつたら、ぼくらは破滅していたかも知れない。けれど、もうぼくには、昔、お菓子もちを貰つた時のように、素直に彼に礼を言うことは出来ないのだ。何かの感情がそれをさまたげていた。彼は、もはや別の世界の住人ではないか？ 姉もまた彼と共に、ぼくら二人から——ぼくと母から神を奪い去つていったのではなからうか？

母は彼をそつとしておきたかったのだ。誰にも触れられずに——娘にも、また共産党にも——そつと母の追憶の世界の奥深くしまつておきたかったのだ。ぼくにはその母の憎悪と愛情の入り混つた感情が判るような気がする。その感情の中で、母は見失つた神を、昔の田原を探し求めようとしているのだ——母親じみた愛情と憎悪の中で、迫つて来る死の影の下で。

母の死はもはや明白に迫りつつあつた。静かに眠りこんでいる母にもう死がすつかり入りこんでいるかとも見えた。父に苦しめられ、父から逃れるために神を求めた母、そして今神を見失つてしまつた母、誰がこの母の魂を導くのだろうか？ そしてどこへ？

ぼくはそつと立ち上り、母をおいたまま下へ降りた。片づけものをしていた看護婦に別れを告げて外へ出た。

ぼくは海岸へ降りて行つた。暗灰色の雲の間から時々薄陽うすびが射した。そのままぼくは砂浜にぐつたりと横になつた。

ぼくはふと顔をあげた。ふしぎな静寂があたりを占めていた。ちようど大きなシンフォニーの一篇が、急調したアレグロの弾音と共に、突然とぎれたような一種不思議な静寂——虚無の底で慌あわただしく形成された不気味な沈黙——そのしずけさの中でまだ何ものかがうずまいている——そんな静寂の嵐がぼくの耳じだを激しく打つた。ぼくは動こうともしなかつた。波の低い連続した旋律が重苦しかった。徐々に暗い何ものかが形成され、突然、破綻はたんがやつて来る——その虚無の断崖だんがいのふちに再び佇たつ自分を感じた。どこか神経の片隅で砂粒がざらざらとこぼれ落ちる瞬間——重苦しい午前。捨てられた便

器にも似た海。重い油ぎった波が嘔吐色の海岸に打ちよせては砕ける。砂のざらざらする感触。低くたれこめた雲。暗灰色。所々にかたまつた赤茶けた雑草を追つて腹の大きな馬が移動する。すてられた馬糞ばふんの匂うような午前。そして海――。

ぼくは父のことを考えていた。肩幅の広い頑丈がんじょうな体格、あの暴風のように突然吹き起る愛撫あいぶ、そしてあの豪放な笑い。ぼくは父を恐れていた。父は母を、それにぼくをも理解しなかった。母のどちらかと言えば繊細な感情は無論、父の理解するところではなかった。夜ごとに起つた父母の衝突――ぼくは父を憎んだ。父は道修町に小さな薬品会社を経営していたので、ぼくと母には、父のいない昼間だけ、幸福がやつて来た。そして、ぼくは夜を極度に恐れた。戸が開いて、《帰つたよ》という父の故意わざと押し殺した声が怖かった。

父は京都の大学を出るとすぐ母と結婚し、母の祖父が起した薬品会社を引き継いだのだった。頭痛薬だとか、腹痛特效薬などを製造する会社であった。父母は互に相容れなかった。この二人がどうか暮すことが出来たのは母の実家の勢力のためもあったが、それよりむしろ父の人間的な良さだった。平凡なむしろ知性の欠けた（父は大学を出ながら講談雑誌などを読んでいるのだった）父ではあったが、父には、何かさばさばした気性が、いわゆる竹を割つたというような気性があった。それが辛じて夫婦の関係を支えていた。けれど、それにも増して、父には、豪放な笑いで何もかもゴマかす――極端に言えばそんな一面もたしかにあったのだった。その一応安定した状態が、あの上海行あたりを頂点として急速に破れ始め、母はその頃から教会こうえに通い出すようになったのだった。父はそれを冷笑した。

破綻がいつのまにか形成されていた。父は欲望のはけ口を——よくあることだが——新しい対象に求めた。世間でよくあること、よくどこにでもあること——それがぼくの家にも起つたのだつた。ぼくはおぼろげながら本能的に感じた——今まで見も知らなかつたものが、ぼくの家庭に侵入して来る——ぼくはその女を知らなかつた。その人はぼくから母を奪つた。母はもう神の世界に仕えることに生甲斐を見出していると見えた。もうそこでは、昔母と味つたあの不安な、けれど楽しい時間を持つことは出来なかつた。母は變つた。父も無論變つた。そのとき、田原さんがぼくらの前に現われて来たのだつた。ぼくらの家庭は破れた。めいめいがひとりひとりの生活に生きていた。神の前で母はひとりになり、父は父でひとり女の家へ急いだ。取り残されたぼくと姉とが、互に憎み合いながら生きていた。

戦争が父の会社を危くした。父はおとろえ老いた。父は酒を飲み始め、毎夜口汚く母をののしるようになった（父はもうその頃、女と別れていたのだ）。母はそれに堪えていた。もはや二人は別々の世界に住んでいるのだつた。そして、戦争が日本に不利なことがハッキリしかけた頃、父は脳溢血で死んだ。母は涙一つこぼさずにそれを見送つた。

ぼくは父の姿に一個の典型的な《日本男子》を見る事が出来る。そして、それは時に応じてぼくの体内から父の分身のように浮び上つた。

その父の葬式の時、涙一つこぼさずに指図していた母の何か勝ち誇つたような——けれどそれは、何という疲れきつた勝利の表情だつたらうか——悪く言えば復讐の歡喜に酔つたような顔を見たとき、ぼくにはあれ程恐れ嫌つていた得体の知れない父の心が何故か判る気がした。父が——憎惡の對

象であつた父が、ぼくには理解出来たのだった。いや、その時になつて愛することさえ出来たのだった。父の血がぼくの体内に流れている——始めて、それに気付いたように、ぼくは複雑な感情を抱いたまま、父の棺の上に倒れかかつた。いや、むしろ今まで漠然としていた《男》が、そのとき、はっきり形をとつてぼくの体内に現われて来たのかも知れなかつた。永久に《母》を理解することのない新しい一個の《父》が誕生しようとしていたのだ。

海風が黒い乾燥した砂塵さじんをまき上げた。薄汚れた石炭殻の道が涯はてしなく続いていた。死者のように動かない河上の赤茶けた廃船——時々、熔接の青白い火花が不気味に船腹に瞬く——クレーンのひびき——様々な騒音——そしてどこからともなく匂つて来る様々な匂い——すえたようなペンキの香、油の香、さびた鉄板の匂い、死人の匂い——黒い乾いた塵をかぶつた街路樹の葉——生物の死にたえた都市、その港の冬……。海風は時々、音をたて、この街々を吹きぬけ、乾燥した黒い砂塵と共に重々しい時の一片を運んだ。

つづきは製品版でお読みください。